FAME NOVEL

ドロウズィ 6 ボインクリームの誘惑

SERIALS

高村宗治

Muneharu Takamura

29週間におよぶニュース・レター『コンセプトレンド』を5月21日の誕生日に終えた。氏は今、何を思うのか、わかっているのは真っ赤なSAABの新車を買うということだけかも知れない。そして氏は、この号の出る7月、ソ連・モスクワへ発つという。2度目の共産圏からの新作に期待したいし期待してもいい。

連載第六回●雑誌の取材で上海を訪れたゲンダ(ライター)、イノウエ(編集者)、ナカニシ(カメラマン)だが、アナクロな中国の魅力のとりこになる。ゲンダはそもそも上海を飲めた恋人ミツコのことが頭から離れないでいる。

「取材は進んでいるの?」

「まあ。君の言ったところは全部回った」

私はあやうくチャイナドレスを買ったことを言ってしまいそうだった。帰国した夜が彼女の誕生日で、その翌日から彼女はミラノへ新居を捜しに出かける。そのあとはもう会えないかも知れない。少なくとも恋人として。

「で、どうだった?」

「よかった。よかったよ」

会いたかった。

「楽しみにしているわ。いろいろ聞かせて」

「ああ」

「気をつけて」

「うん」

もうそれ以上は話せなかった。

「じゃ、空港から電話する」

電話を切ったあと、ベッドに入ったが眠れなかった。窓の錠が壊れていてわずかな隙間から上海の空気が流れこんでくる。深夜テレビも酒も音楽もない部屋での夜ふかしはせつなく、心細かった。

例によって、四日目の朝もクラクションの轟音で目がさめた。イノウエたちは太極拳の撮影に出かけたろうか。いけない。九時からの朝食が始まっている。手早く洋服を身につけ私はレストランへと急いだ。

お粥と中国製サラミと汁そばの朝食を取り始めたところへ、イノウエとナカニシが姿を見せた。

「おはよう。どうでした。太極拳は」
「撮りました。でも人は少なかった。六時頃からやってるみたいでもう終り際でした」
ナカニシがカメラを机へ置き、言った。
「ゲンダさん、今日の予定は?」
イノウエが治療中の肩を押え、聞いた。
「十時からイノウエさんの最後の治療。昼までで終りますから、午後の予定をつくらないといけない。夜は日航ホテルへ行きたい」
「バドミントンをやりませんか。昨日、倶楽部のスタッフがやってた」
「健康的ですね。イノウエさん、ついに女性をあきらめた。これはいい傾向だ」
「あきらめてはいません。漢方薬の強壮剤を買って日本で勝負することにしましたよ」
「この男はしつこいですから」
そう言うナカニシは淡白を装っているが、イノウエによると三人のうちで最も女好き、ということになっている。
食事を終え、いったん私たちは部屋に戻った。十時になり、三号館のクラブハウスにある診療室に集合した。イノウエの治療は日曜をはさみ今日で三回目。一回目は中国針・中国医術・気功・西洋医学の四人の医師による問診。この質疑応答で滞在中の治療の方針とプログラムが決まる。イノウエは生まれつき右肩が脱臼気味であること、そのため手に力が入らないこと、そして暴飲暴食による胃袋の肥大=胃下垂を訴えた。二回目は針とマッサージ。体に刺した針の頭にもぐさをのせ、火をつける。カチカチ山のタヌキのように背中から火と煙を出す姿は奇怪だった。
仕上げは肩の悪い血を吸い出す吸い玉だ。直径七センチほどの丸いフラスコのようなガラス瓶に一瞬火を入れ、肩に当てる。真空状態になったガラス瓶へ、みるみる肩の肉が吸いこまれ、大きくはれ上がる。二日たった今日も、裸になったイノウエの両肩は赤黒い円形のアザが刻まれている。
「先生、今日は……」おそるおそる、イノウエが聞く。主治医というべき中国医術の陳先生は、イノウエをベッドに促す。気功の先生がイノウエに寄る。
気功は手をふれずに、患部にかざした手から不思議の力を発し、体を治すハンドパワーだ。心霊治療のような、摩訶不思議医術である。
ナカニシは他の患者を撮影している。その大半は六〇代と七〇代。短期の滞在者は少ない。日本の医師がサジを投げた白内障、リウマチそのほか原因不明の病気に悩み、訪れた人たちが多い。医師たちは上海中医学院という日本で言えば医大の偉い先生たちで、患者は大企業の会長、資産家など時間と金に余裕のある人びとだ。
診療室がにぎやかになってきた。
四人の医師と五、六人の患者、そして付き添いの家族、看護婦さん、取材陣。八畳ほどの診察室は人でいっぱいになった。そうこうしている間に診療室へ漢方薬が届けられてきた。煎じたての漢方薬はステンレスのポットに詰められ、ひとり当りまるまる一本を一日で飲む。
イノウエ氏にも帰国時に一ヵ月分の漢方薬が出る。しかし彼は朝晩漢方薬を煎じられるのだろうか。
「そうだ。ナカニシさん。土産に持って帰る薬を買いませんか。今日頼んでおかないと明日もらえないでしょう」
「そうですね」
診療室の向かいのロビーに薬の名前、薬効を書いたパネルと実物が陳列されている。かぜ薬、目薬、胃薬といったオーソドックスなものから、やせるお茶、女性の胸を大きくするボインクリーム、シワとり効果のパールクリームなど、買い手をそそる品揃えと価格。日本で何万円もする薬や化粧品が二、三千円だから買わないと損に思えてくる。ほとんどブランド品を買い漁る女性心理である。
「僕、ボインクリーム買います」
ナカニシが宣言した。私も父や母に薬を買おうと、品目をメモした。アッという間に三万円を超えた。
「このメモをウエダさんに渡しましょう。これで他の土産はいらない」
そこへイノウエが来た。
驚いているらしく、目がまん丸だった。
「すごい。すごいものを見た。気功ですよ。手と手をこう、くっつけないのに先生が力を入れるとドン、ドドドーン、と力が来る。驚いた。本当に驚いた」

■次号へつづく

 ■©Concept labo incense/Art Direction Karesansui Nagareishi/Photograph Harry Nakanishi